

もっと可愛い女の子だったら良かったのに。
私、電柱を育てている気分だわ。
ねえ知ってる？
最近の電柱は地面に埋まってるのよ？
あんたも少し埋まってみたらいいんじゃない？
そうしたら背も小さくなって、少しは可愛くなるかもしれないじゃない。

母親は酔うと決まってそんな台詞を口にする。
若かりし頃、ロリータファッションに傾倒し、ロリータ系雑誌の読者モデルとして活躍したこともある母親は女の子が生まれたなら「ヘッドドレスの似合う子に育てよう！」と心に決めていた。
それなのに実際に産まれてきたのは手足が大きく、身長がみるみる伸びていくヒョロ長い電柱のような娘だった。

あの人に似たせいだ！
あんな男の娘なんて産まなければよかった！
あんた、ひょっとしてアタシの子じゃないんじゃない？
病院で取り違えられたんだわ。
返品交換できないかしら。

ほとんど家に帰らなくなった父親と娘、波瑠を罵るのは半ば母親の日課だった。酔っぱらってそうすることでお酒が美味しくなる儀式にも波瑠には見えた。

けれどその一方、酔っていない時の母親はとても優しく、波瑠の髪の毛をくしけずってくれたり、おやつにケーキを焼いてくれることさえあった。母親のつくるベイクドチーズケーキはほろ苦いレモンピール入りで、波瑠の好物だった。

こんなに美味しいものをつくってくれるのだから、母親が酔って自分のことを酷く言ったとしても「きっと本心じゃない」、「今は気持ちが不安定なだけ」と幼いなりに波瑠は信じていた。

けれど、そんなものは幻想だった。

波瑠が5歳の誕生日を迎えたその日の夕方、大きな包みを抱えた母親が玄関扉を勢いよく開け放って帰宅した。いつになく上機嫌な母親に抱えられた包み紙はカラフルでお菓子のパッケージみたいだった。母親に促されるまま、波瑠は無心でパッケージを破いた。ブランドものの子供用ワンピースが中に包まれていた。フリルのあしらわれた薄桃色のワンピースはとても女の子らしくて、可愛かった。まるでアニメに出てくる魔法少女の衣装のような服を前にして、波瑠の胸の奥が熱くなった。興奮して波瑠は母親に何度も、ありとあらゆる言葉の限りを尽くして感謝を伝えた。

「――波瑠の身長に合うのが丁度あったから」

母親がやや照れくさそうに笑うのを横目に、波瑠は喜び勇んでワンピースへ袖を通した。滑らかな生地が肌に触れるのが新鮮だった。着慣れておらず、背中のファスナーを閉じるのだけは母親に手伝ってもらった。なんとか着終わったのに気付くと、波瑠は足早に姿見の前へいき、自分が可愛くなっているかを確認した。

鏡の中にいたのは「可愛い服」を着たいつもの自分だった。ワンピースの袖からは年の割にやけに長い腕が伸びていた。細く長い首は丸い襟首から突き出して、まるでダチョウのようだった。

可愛い服を着たからといって、可愛くなれるわけではないという当たり前のことを波瑠は初めて知った。波瑠の目には鏡の中の自分が「可愛いワンピースを着たヒョロ長い謎の生き物」にしか見えなかった。

「アハハハ！ 木の枝に服が引っかかってるみたい！」

後ろから母親の笑い声がして、波瑠の視界はぐにやりと歪んだ。堰を切ったように涙が溢れて、止まらなくなった。どこかで幻想の砕け散る音がした。気がつけば裸足のまま家を飛び出していた。

波瑠は走った。

父親のあまり帰ってこない家を、母親の笑い声を置き去りにして何処か遠くへ行ってしまったかった。

夏の夕陽は阻むようにギラついて、波瑠の体をじっとりと湿らせた。小さな身体はすぐに干上がり、息があがった。ワンピースの裾は汗ばんだ太股に絡みついて、脚がもつれた。足の裏は砂利や何かの破片が突き刺さって血塗れになり、痺れるような痛みが走った。気持ちは風を切って遙か遠くへ駆けていたはずなのに、身体は重たくなって動けなくなった。

いよいよ力尽きた波瑠はその場にペタリと座り込んだ。と同時にヒンヤリした心地のよい感触がすねに伝った。座り込んだ足下にはシロツメクサが群生していた。

こんなところにシロツメクサの生えた場所なんてあったっけ？

疲れ果ててボンヤリした頭で疑問に思いながら、波瑠は見とれた。

夕陽に染まってオレンジ色の花を一面に咲かせたシロツメクサではなく――そのシロツメクサの上に座り込んだ、ブロンドヘアの女の子に。

足裏の痛みも忘れて、波瑠は初めて目にする金色の髪の毛に息をのんだ。赤らんだ日差しを受けてなお眩い金の髪。夕陽の所為にしては紅すぎる瞳。長いまつげ。艶っぽい唇。同い年くらいに見えるのに少し大人っぽく感じられた。

その外国人と思しき女の子は不器用そうな手つきでシロツメクサを摘み、花冠をつくろうとしていた。

「――そうじゃないよ」

波瑠は女の子の隣に座り込み、一緒に花冠を作り始めた。女の子に作り方をひとつひとつ見せながら花冠を編むうちに、波瑠は家や母親のことなんて別世界のものへ変わっていくような感じがした。

「――できた！」

陽も沈みかけた頃、ライカと名乗ったその女の子は自信満々な表情で出来上がったヨレヨレの花冠を差し出した。

波瑠は苦笑いしながらそれを頭へかぶり、代わりに自分の編んだ花冠をライカの頭へ載せてやった。

ふと、その弾みで波瑠のかぶっていた花冠がゆるんだ。ライカの編んだ花冠は首もとまでずり落ちた。あっという間に花冠は花の首飾りになってしまった。

波瑠とライカは目を合わせてパチクリさせると、嘖き出した。笑いが次から次に湧いてでてお腹が苦しくなった。

何が面白いかなんて判らなくなっても、笑っていること自体がなんだか可笑しくて笑ってしまった。

そうして笑い疲れたころ、

「波瑠ちゃん、首飾りしてるとお姫様みたい」

とライカが言った。

母親には罵られてばかりで、そんなことを言われ慣れていない波瑠は気恥ずかしくて俯いた。

「ライカが冠かぶってるから……、そうだ！　ライカが王子様で、波瑠ちゃんはお姫様ね！」

ライカは波瑠の手を引いて走り始めた。

「王子様はね、お姫様を悪い魔女から助け出すの。だから波瑠ちゃんは私についてきてね！」

波瑠は嬉しくて頷いた。

その一言が心を照らし、淀みがパアッと晴れていくのがわかった。

波瑠にはライカが本物の王子様に見えた。

赤い瞳で金髪でとっても可愛い王子様。

ライカについて行けば何処か素敵な場所へ、本当にたどり着ける気がして、波瑠は血の滲んだ足で駆けだした。

それからというもの、波瑠は嫌なことがあるとライカと一緒に走り回って遊んでいた。走っている間は嫌なことを全て忘れられる。それに、ライカとなら何処へでも行けると理由もなく信じていた。

日が暮れて家に帰らなくてはいけない時間になると、波瑠は「今日もライカは連れ去ってくれなかった」と拗ねたような気持ちになって、帰るのを嫌がった。その度にライカは諭すように波瑠を優しく抱きしめ、「また会えるから」と囁き、耳元へキスをした。

ミルクの残り香の漂うライカの柔らかな唇が耳に触れると心地よくて、波瑠はどれだけ帰りたくないかと強く願っていてもその気持ちを飲み込んでしまう。

未練混じりに「またね」と言って、ライカと別れるのを何度繰り返しただろう。

数年が過ぎたある日、波瑠はライカに会えなくなった。

普段なら嫌なことから逃げ出して走っていると、いつの間にか着いていたシロツメクサの花畑は影も形も消えていた。街の何処にも存在しなくなっていた。

昨日まで二人で遊んでいたと思っていた場所は、老人ホームの建設現場に変わっていた。

建設現場の入り口に立っていた工事のおじさんにライカや花畑のことを訪ねても、怪訝な顔をされるばかりだった。

その場所はもう一月も前から工事中だった。工事が始まる前は荒れた墓地で、子供それも女の子が好んで入るような場所ではない場所だとも言われた。

おじさんの言葉を聞いた途端、波瑠は不思議な感覚に囚われた。

確かにライカに会ったという実感はあるのに、思いだそうとすればするほど、波瑠の中からライカと遊んだ記憶が滲んでいく。

具体的にどんなことをしていたのか、どんなことを話して笑いあったのか思い出せなくなっていく。

彼女の声も、血管の透けた白い手首も、顔さえも急にピントがずれたようにボヤケていく。

恐ろしくなって、波瑠はその場から走り去った。

走りながら、ライカと走っていたことだけは忘れないようにしよう、と強く念じた。

数日が過ぎた頃、「彼女」の名前も思い出せなくなった波瑠は走っていた。

どうして走るのか、もう波瑠にはわからなかった。

ただ、走っていると自由で幸せな心地になれた。

地面を蹴るほど遠くへ行ける。

身体で切り裂く風は爽やかで、どこかシロツメクサの香りを思わせる。

足の裏が痛くなろうと。

爪に血が滲もうと。

雨の日も。

風の日も。

雪の日も。

走り続けた。

誰かが迎えにきてくれる、

その日が来るのを待つように。

その日が来たなら、走れるように。

(本編へ続く)